



Title	ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道（後編）
Author(s)	中, 直一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2010, 10, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73821
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道（後編）

中 直一

4 英訳版への批判とオリジナル版出版の意義

ビュッシングの『週報』は、本プロジェクト前号で考察したように、ケンペル日本論の原稿がレムゴで発見されたこと、および筆跡鑑定の結果、それがケンペルの真筆であることが証明された旨を報じていた¹。

レムゴで発見された原稿（レムゴ原稿）がケンペル自筆であると仮定すると、ロンドンで出版されたショイヒツァーによる『日本誌』英訳版、およびその翻訳底本となった原稿（ロンドン原稿）との関係をどう判断するのか。現代の研究者にとってこれは大きな問題であるが、18世紀の学者たるビュッシングにとっても、この問題はきわめて重要なものであった。

結論を予め述べるならば、ビュッシングの態度は、当初終始一貫して英訳版の誤謬を指摘しつつレムゴ原稿の価値を称揚するというものであったが、1779年に『日本誌』ドーム版下巻が出版されてからは若干論調が変わり、英訳版の価値をも認める姿勢に転じたと言える。

まずは英訳批判が端的に表れた箇所を引用する。以下に示すのは、『日本誌』ドーム版上巻が出版される少し前にあたる1777年3月に『週報』誌に掲載された記事の中に含まれる文章である。

「翻訳が原典から乖離している箇所は非常に数多い。それゆえドイツ語の基本テキストを世に出すことは、おそらく努力に値することであろう。」(24.3.1777, S.101)²

上の引用文中の「翻訳」という語は、原文では *Uebersetzungen* と複数形で記されている。すなわちビュッシングは英訳のみならず仏訳をも念頭に置いて論じ、その両方ともに、レムゴ原稿との相違点を含むことを指摘しているのである。ただし、具体的にどのような相違点があるのかについて、ビュッシングはこの号では全く述べていない。実はこの号の4年前の1773年、レムゴ原稿発見の直後に、ビュッシング自身がレムゴ原稿と英訳・仏訳をサンプル抽出的に検討し、英訳・仏訳の問題点を指摘していた。それゆえ、ビュッシングは1777年の段階で改めて具体例を挙げる必要性を感じなかったのであろう。

本稿では1777年のビュッシングの発言の根拠を知るために『週報』1773年8月9日号を調査したい。そこにおいてビュッシングは、『日本誌』第1巻第5章を例に取って³、自分が眼にしているレムゴ原稿と英仏訳の対比を行っている。第1巻第5章は日本の行政区画を紹介した章で、そのうちビュ

ッシングは畿内五ヶ国の部分を扱い、英仏訳がレムゴ原稿と乖離している点を指摘している。ビュッシングは複数の文を例に挙げているが、ここではその中から一つのみ紹介する。

畿内五ヶ国のうち和泉の国に関して、ビュッシングはレムゴ原稿を引用している。そこでは和泉の国について「大きな (groß) 国であり、地味は悪い (schlechten Grundes)。……前には大きな湖があり(vorn mit einem großen See)、後ろは山々で閉ざされている。魚が多く、ソバ、米、豆その他の穀類(Bohnen, und andere Hülsenfrüchte)を産するが、品質は悪い (von schlechter Art)」(9.8.1773, S.251／中略箇所原文、下線部引用者)⁴と記載されている。すなわちここで和泉の国が単に「大きな」国であり、土地がやせていて(「地味は悪い」)、またこの国の前に広がるのが男性名詞の See すなわち「湖」である、と記載されている。さらには生産される農作物四種のうちの二つが「豆その他の穀類」と紹介されている。

これに対しショイヒツァーの英訳では「それは非常に大きな(very large)国であり、地味は良くも悪くもない(indifferently fruitful)。……一方を海で(by the sea)、他方を高い山々の背で仕切られている。隣の海から魚が豊富に供給され、ソバ、米、エンドウおよび豆 (pease and beans) を産する。しかしほんの少しであり(though but few)、最高の品質ではない(not of the best sort)」(a.a.O., S.252／『週報』におけるビュッシングの引用による／中略箇所原文、下線部引用者)となっている。すなわち、和泉の国が「非常に」大きな国であり、地味は「良くも悪くもない」とされ、また一番大きな相違点であるが、和泉の国の前に広がるのが、レムゴ原稿で「湖」となっている箇所を、ショイヒツァーの英訳では「海」となっている。また生産される農作物四種のうち二種が「エンドウおよび豆」であり、レムゴ原稿にはない「しかしほんの少し」であるとの文言が加わっている。また品質についても、レムゴ原稿が「悪い」と直接的な表現を用いているのに対し、英訳では「最高の品質ではない」と、間接的な言い回しになっている。このように指摘した後、ビュッシングは簡潔に次のように述べている。

「これは基本テキストからの甚だしい変更である。」(a.a.O., S.252.)

ロンドン原稿を参照することの叶わなかった(あるいはそのようなものの存在を想定していなかった)ビュッシングは、レムゴで発見された原稿のみが唯一真正なケンペル自筆原稿であると考え——一本プロジェクト前号で述べたように、ビュッシングは筆跡鑑定の作業をおこなって、レムゴ原稿がケンペル自筆であることを確認している——、英訳とレムゴ原稿に相違点が見つかった場合は、英訳に誤謬ありと判断した。現代のわれわれは、ロンドンとレムゴの間でケンペルの原稿の複雑なやりとりがあったこと、そしてロンドンにもレムゴにも手書き原稿が存在していた(らしい)ことを知っている。だがそのような事情を知らぬビュッシングの立場に立ってみれば、「自筆原稿はひとつ」との前提に立つのは、ある意味ではしごく当然のことであり、また彼の目の前にある原稿がケンペル自筆との筆跡鑑定を済ませたものである以上、自筆原稿と翻訳に相違が発見された場合、翻訳に誤謬ありとするのも、これまたきわめて自然な判断であったと評価し得る。

ただし、事実に関して言うならば、例えば和泉の国(今日の大阪府南部)の前に広がるのはショイヒツァーの言うように海(大阪湾)であり、これを湖とするのはレムゴ原稿の方に間違いがある。またショイヒツァーが翻訳底本としたロンドン原稿では、上記下線部が„Vorn mit einer grosen (sic!) See“と、

女性名詞 See が使用されていて、「大きな海があり」との記載になっている⁵。またレムゴ原稿を翻訳底本とした筈のドーム版においても、この部分が„Vorn ist es mit einer großen See“, すなわち女性名詞 See を使用して「海」であることを明示している⁶。ドームはショイヒツァーの英訳を参照し、また日本地図を参照しつつ、レムゴ原稿の記載に誤りありと判断したようである。

このようなドームの判断が示されるのは1777年の『日本誌』上巻の翻訳におけるのが初めてであり、1773年の段階ではビューッシングはそのようなドームの判断を知る由もなかった(というより、ドームの編集作業は1773年に緒に就いたばかりであった)。

いずれにせよ、1773年の段階、すなわちレムゴでオリジナル原稿が発見された直後の段階では、ビューッシングはレムゴ原稿の記載がすべて正しく、レムゴ原稿と英訳の間に相違点が見られた場合は、あたかも全てが英訳の誤謬であるかのような態度を示している。

ビューッシングは、上に紹介した和泉の国の例の他に、いくつか畿内諸国に関して英仏訳とレムゴ原稿の相違点を指摘しつつ、ケンペル自筆原稿に基づくドイツ語版出版の必要性を説いている。1773年の『週報』記事に関しては、筆者はすでに別の箇所で紹介したことがあるので(ただしそこでは、幻のレムゴ原稿の実態を明らかにする、という方向での紹介が中心であった)⁷、本稿では上記1例の紹介のみにとどめる。

このような英訳・仏訳批判から6年ほど経過した1779年になると、本論文冒頭に述べたように、ビューッシングの論調は、それまでの英仏訳批判一辺倒の調子とは若干違って来る。1779年はドーム版『日本誌』は下巻が出版された年だが、ビューッシングは出版の少し前(同じ年の2月)に「[……]私は下巻の大部分を目にしている。銅版画は全く完成しているので、次のライプツィヒ書籍市で下巻を入手できることは疑いようがない」(15.2.1779, S.54)と述べ、『日本誌』下巻本文のかなりの部分が配本された旨を報じている。そしてビューッシングは下巻の既配本部分のページ付けを挙げて、英訳版とドーム版の相違点を指摘しているが、そこで挙げられているページ付けは現行のドーム版のページ付けと一致する。

まず以下に、従来通り英仏訳を批判している箇所を取り上げる。

「原典にはしばしば、翻訳〔複数形〕とはかなり違うことが書かれているし、それどころか、翻訳に書かれているのは逆のことが記載されている。例えば184ページでは、上品でないひとつの振る舞いについて書かれている。翻訳では、これがこの国での日常的な習俗(Sitte)であるように書かれているが、原典では全く逆である。」(15.2.1779, S.54) (括弧内注記は引用者)

ビューッシングは上のように述べるのみで、当該の「184ページ」にどのような事が書かれているのかについての具体的な記載をなしていない。実際にドーム版の184ページを調べてみると、次のような箇所がある。それは、街道を歩く物乞いの比丘尼たちがいかに美しいかを述べた後に続く、次の文章である。「しかしこの物乞いの女性たちを賞賛しすぎないためにも、私は次の事を言わなければならない。すなわち彼女たちは、この国の習俗や宗派の習慣に反して(wider die Landessitten und Ordensgebräuche)、恥じらいの気持ちをさほど持つことなく、お金をくれそうな旅行者に対し、公道で胸をはだけて見せる

のである。それゆえ私は、彼女たちがいかに剃髪して宗教的であろうとも、軽薄で行儀の悪いあの女性連の数のうちから除外しかねるであろう」⁸。そしてドームはこの文章に注記して「ショイヒツァーは、彼女たちはそれがこの国の普通の習俗であるという見せかけのもとに、そのようなことをしている、と述べている。本文に書かれているように、私が読んでるのはその逆である」⁹と述べている。つまりビュッシングが指摘していることは、ドーム自身の脚注に書いていることと同一の内容であり、このことから、ビュッシング『週報』当該号においては、ドームの判断がそのままビュッシングにより踏襲されていることが分かる。（ちなみに、先に紹介した畿内の地名に関する英訳・仏訳批判の部分では、ビュッシング自身がレムゴ原稿と英訳版・仏訳版を対比・検討していた。）それはともあれ、ドームおよびビュッシングにより、逆のことが書かれている、と指摘された英訳版を読むと、ドーム版で「この国の習俗や宗派の習慣に反して」となっている部分が、「この国の習俗であるという見せかけのもとに(under pretence of its being customary in the country)」¹⁰となっていて、公道で女性が男性に胸をはだけて見せることが、江戸時代の日本ではひとつの習俗であったという記載内容になっている。このようにビュッシングはドーム版と英訳版に相違点が存在することを指摘している。英訳版が間違っている、と明言されているわけではないが、6年前の英訳・仏訳批判を知るわれわれとしては、言外の言として、英訳の誤謬が示唆されていると考えてよからう¹¹。

だが、このように英語版とドーム版の相違を指摘してドーム版の価値を称揚した後、一転してビュッシングは次のように指摘する。

「しかし、いくつかの点においては、英訳のほうがD氏(マ)の編集しているドイツ語原稿よりも、より良く、より完全で、より信頼性がある。例えば236ページである。」(15.2.1779, S.54)

ここでもビュッシングは単に「236ページである」としか記しておらず、それ以上具体的なことを述べていないが、実際にドーム版下巻236ページを見ると、ドーム自身による脚注が2カ所あり、そのいずれにおいても、ドイツ語原稿よりも英訳の方に信頼性のある旨が記されている。それは次のような箇所である。

第一は、ケンペルが当時の京都の人口について「京都改め」に基づいて「城(Burg)、内裏の小邑(Städtchen des Dairi)および多数存在する寺院に住む人々を除外すると、ここでは男子120万人、女子140万人を数える。これはミヤコ(Miaco)で毎年行われる改め(Aratame)に見られるものである」¹²と述べている箇所である。この文のうち、「男子120万、女子140万」という箇所にドームは脚注を施し、次のように述べている。「この信じがたい数字が、私の2種の手書き原稿にははっきりと書かれている。これが間違いであることは、英訳においてそのような数字が全く書かれていないことにより証明される。英訳では手書き原稿とは比較にならないくらい信頼性の高い正確な人口台帳が記されているのである」¹³。

実際ショイヒツァーの英訳を見ると、当該の箇所は「ミヤコ(Miaco)の人口は以下に示す改め(Aratame)に示されるであろう。但しそこでは、城及び内裏(Dairi)の宮廷に住む人はすべて省略されている」¹⁴とのみ書かれていて、男子120万女子140万との数は示されていない。18世紀で世界最大を誇った江戸でさえその人口は100万人程度であったと推定されているくらいであるから、京都の人口が男女あ

わせて260万という数字を「信じがたい数字」と見なし、ショイヒツァーの英訳版の方が信頼に値するとしたドームの判断、およびその判断を支持するビュッシングの考えは、きわめて常識的なものであったと言い得る¹⁵。

第二は同じく京都について書かれた部分の、いちばん最後の箇所である。その箇所で、ドームは英訳版に掲載されている「京都改」の人口データのリストを採録しつつ、彼の手元にある手書き原稿では「京都改」のリストがまったく欠落していることを指摘して、次のように注記している。「ここから本章の末尾にいたる全ての部分を、私は英訳から採録した。私の手書き原稿にはそのような部分はない。しかし二つの手書き原稿ともに、このリストのために数枚の紙が白紙のままに存在している。このことから、また直前に書かれている言葉から、この部分が疑いもなく著者自身に依るものであり、ショイヒツァーが翻訳の底本としたオリジナルの方が、ここに関しては私の手書き原稿より完全であることが証明される。」¹⁶

上にドームが「直前に書かれている言葉」というのは、ドーム版に掲載されている「京都改」のリストの直前の「考察を巡らすのが好きな人のために、私は最新の改め(Aratame)をお伝えしよう」¹⁷という部分を指す。たしかにこの文章を読めば、当然、この次に最新の「京都改」データが掲載されてしかるべきである。そのようなものがドームの手元になく、かつショイヒツァーの英訳に掲載されている以上、ドームとしては（そしてビュッシングとしても）、レムゴの原稿よりもロンドンの原稿のほうが「より完全」であると判断したことは、これまたきわめて自然な判断であった、と言えよう¹⁸。

『週報』に掲載された12本のレムゴ原稿関係の報道記事においては、上に記した通り、世に流布している『日本誌』英訳・仏訳の問題点を指摘しつつ、ドイツ語によるオリジナル原稿出版の意義を強調するという面が強かったが、必ずしもその側面のみではなく、ドイツ語のオリジナル原稿に不備がある点も報道し、部分的ながらも英訳版の方が信頼し得る記述となっていることを読者に伝えている。このような『週報』誌の報道姿勢から、われわれは18世紀ドイツの学術雑誌が、学問にどの程度客観性を求めていたか、ということを知ることが出来るのである。

5 愛郷心

ビュッシングは前節で見たように、レムゴ原稿と英仏訳を対照した調査結果を『週報』誌上に掲載したが、その執筆の態度は、おおむね客観性重視の姿勢と評し得る。もうひとつ注意しなければならないのは、そこに客観性云々といった事柄とは異次元のもの、すなわち郷土愛・祖国愛等のモメントも盛り込まれている、という点である。すなわちビュッシングは、「祖国」(Vaterland)、「国民」(Nation)ないし「愛国者」(Patriot)等の語を使用して、ケンペル自筆原稿によるドイツ語原典版出版の意義を説いているのである。

例えば1773年、前節で見たようにビュッシングは英仏訳とレムゴ原稿との対比作業をかなり詳細に行い、その結果を『週報』誌上に公表したが、その調査結果を記した後に、彼は次のように述べている。

「ケンペルの著書を、それが執筆された言語の形で出版することが、いかに必要かつ有益であるか

を、上記の調査が証明している。もしこの著作を原語で流布させることを欲しないとすれば、それはまた、われらがドイツの祖国から(unserem deutschen Vaterlande)多くの榮譽を遠ざけることとなるであろう。」(9.8.1773, S.253)

この文章の前半部分においてビュッシングは、ドイツ語オリジナルに基づく『日本誌』出版の意義を強調している。だが文章の後半になると、ドイツ語版出版の意義を論じつつも、そこに新たに「われらがドイツの祖国」という概念を登場せしめている。つまりビュッシングは、ドイツ語オリジナル版の出版に対して、いわば国民的意義を認めようとしているのである。このようなビュッシングの立場は、ドーム版『日本誌』上下巻の出版が完了した1779年の段階でも変わっていない。

「この重要な著作を著者自身の手書き原稿の形で入手することは、実にドイツ国民の案件(eine Angelegenheit der deutschen Nation)であった。このような意見に与しない人のことを、私は気の毒に思う。彼らは今回のような状況において、フランス人やイギリス人ほどには、愛国的に考えていない(nicht so patriotisch denkt)のである。」(6.9.1779, S.286)

先の引用文では「祖国」(Vaterland)が、そしてここでは「国民」(Nation)という語が使用され、いずれも「ドイツの」(deutsch)という形容詞が冠せられている。ケンペルの『日本誌』ドイツ語版出版の意義を全ヨーロッパ的な視点で捉えるというより、むしろ「ドイツ国民の案件」というように、かなり限定的に捉えている。そしてイギリス人とフランス人という具体的な国民の名称を挙げて、これをドイツ国民と対比せしめている。この文章のみを読めば、すでに国民国家が成立していたイギリスとフランスに対し、いまだ300近い大小の国家・領邦等が乱立していた18世紀末のドイツにおける学術雑誌が、言語文化研究の出版という面に関してではあるが、ドイツ国民国家の存在意義をも学術論文の中で強調していたと解釈し得る¹⁹。

以上のようにビュッシングは英仏に対抗すべきドイツの祖国、国民というものを強調しているのだが、実は仔細に見ると、ビュッシングの念頭にある「祖国」ないし「国民」が、必ずしも今日の国民国家としてのドイツを指すとは思えないような発言も見られる。例えばビュッシングは、『日本誌』の印刷が始まったことを報じて次のように言っている。

「著者の原典は、わが国民(unsere[r] Nation)に榮譽をもたらすものであるが、英訳および仏訳と少なからず異なっている。従来、ひとは英訳および仏訳に頼らざるを得なかった。ケンペルの同郷人(Landesmann[s])であるドーム氏の巧みな努力により、原典版はかなり実用性あるものになっている。」(19.8.1776, S.275)

この文書の前半は、たしかに英仏訳に比してのドイツ語原典版出版の意義を「ドイツ国民」の「榮譽」として称揚するものである。だが後半の部分で『日本誌』編集者ドームを、あえてケンペルの同郷人としていることが注目される。「同郷人」といっても様々なレヴェルがあろう。ドイツというかなり大きな単

位を指す場合も考えられるが、実はケンペルもドームも、ヴェストファーレンのレムゴなる小都市の出身である。つまりここでの「同郷人」という語は、広くドイツ全体を指すともとれるが、他方また、きわめて狭くレムゴのみを指すとも解しうる。

ビュッシングはもう一箇所で同様の発言をなしている。それは『日本誌』上巻が出版された『週報』1777年の記事である。そこでビュッシングは『日本誌』上巻出版を喜びつつ、それがドイツの、そしてリッペ伯領国の、そしてさらにリッペ伯領内に位置する小都市レムゴの榮譽となることを述べて、次のように記している。

「価値あるこの著作がドイツ語の原典で印刷されるのを目にして喜ばないような人は、ドイツの愛国者ではない(kein deutscher Patriot)であろう。人は今まで、英訳においてのみ、そして英訳から重訳された仏訳においてのみ、本書を手にしてきた。すなわちそれは、信頼の置けない、そして見ての通り、必ずしも正しくないものなのである。いまや私たちはようやく、栄えあるわれらが同郷人の著作(unseres würdigen Landsmanns Werk)を所有しているのだと言い得る。ケンペルが何を語り何を語らなかつたのか、ということを決定すべき際には、ひとはこの版にのみ依拠し得るのである。この立派な著作は、著者・編集者そして出版人がみな、リッペ伯爵領国に生まれた。このことはリッペ伯爵領国にとって榮譽である。」(30.6.1777, S.209)

この引用文以前に引用した文章においては、「祖国」なり「国民」なりといった概念は、英仏と対比せしめられる「ドイツ」あるいは「ドイツ国民」とのニュアンスがあった。ところが、この引用文の中程にある「同郷人」とは、いったい「ドイツ」を指すのだろうか。そうとも取れるが、引用文後半の記述を見ると、そうとも限らない。「著者・編集者そして出版人がみな、リッペ伯爵領国に生まれた」との記述は、著者ケンペル、編集者ドーム、そして出版人であるマイヤー書店社主ヘルヴィングがいずれもレムゴ出身であることを指す。そしてビュッシングは、レムゴ市を支配下に置くリッペ伯爵領国にとって、『日本誌』出版に関係する三者が全てレムゴ出身であることが、ひとつの榮譽であると評している。このような評価の方向性からすると、ビュッシングの言う「同郷人」とは「ドイツ人」であるというよりは、むしろ「リッペ伯領の同郷人」とのニュアンスを持つものと解される。

上の引用文は『日本誌』上巻が出版された1777年の時点でのビュッシングの発言だが、マイヤー書店が『日本誌』出版を決めた直後の1773年の段階でもビュッシングは、『日本誌』出版をドイツ全体の問題であるというより、レムゴという小都市にとっての榮譽であるとの書き方をしている。

「同書店 [=マイヤー書店] はそのこと [=日本誌ドイツ語版を出版すること] により、レムゴ市に対して敬意を表すことになり、レムゴ市はエンゲルベルト・ケンペルを、わが町の子(Stadtkind)として自賛し得るようになる。それだけになおさら、このこと [=銅版画挿絵の入った上質紙使用大型本で出版すること] を望み、要求する権利があるわけである。」(9.8.1773, S.253) (括弧内注記は引用者)

この段階では、マイヤー書店は『日本誌』出版を引き受けたばかりであり、実際にどのような形態の出版物となすのかについては、まだ検討以前の段階であったと思われる。その段階でビュッシングは、レムゴの出版人マイヤー書店が、「わが町の子」たるケンペルの著述を出版することを、レムゴ市自体の榮譽と考え、その上で、上質紙を使用した大型本の形態で『日本誌』を出版することがふさわしいものとの見解を示している。

以上のような記述を見れば、ビュッシングがいう「祖国」あるいは「国民」といった概念が単純一様なものでないということが推測し得る。すなわち、英仏という国民国家に対抗すべきドイツ語圏の全体を指すようであり、かつまた、レムゴなりリッペ伯領なりといったかなり限定された地域を指すようでもある。すなわちわれわれとしては、18世紀末の学術論文における「祖国」あるいは「国民」といった概念に対し、19世紀的な国民国家的観点では解釈しきれない、揺れのある、必ずしも明確とは言えない含意のあることを確認しておかねばならないのである。

それでは、何故このような不明確な（あるいは融通無碍な、と言ってもよい）概念を使用してまで、ビュッシングは『日本誌』出版の意義を称揚したのであろうか。一つには、すでに論じてきたように、英語訳フランス語訳とは異なるオリジナルのドイツ語版出版の価値を喧伝するためであったが、実はもうひとつ、かなり世俗的な要請もあったようである。それは出版に向けての資金確保といった、きわめて現実的な事柄に関するものであった。

6 出版費用調達のための実践的意義

『週報』誌上には、「愛国心」に訴えて『日本誌』購入を促すビュッシングの発言が見られる。例えば『日本誌』上巻の部分的頒布が開始された1777年3月の記事で、ビュッシングは次のように述べている。

「それ [= ドイツ語の基本テキスト] を頒布することは、平均的な愛国心によつてのみ(nur durch mittelmäßigen Patriotismus)促進された。最も熱烈な愛国者(der stärkste Patriot) はすでに50年以上前から、ドイツの外にいる。すなわちモスクワの枢密顧問官ミュラー氏(Herr Staatsrath Müller)は、私を通じて50ターラーで頒布本を注文したのである。」(24.3.1777, S.101) (括弧内注記は引用者)

書籍の出版に莫大な費用がかかった時代である。出版関係者は購入予約をつのり、場合によっては前金を支払ってもらって初めて、出版の計画が実現に向かった。このような時代状況の中でビュッシングは、『日本誌』上巻の発刊を可能ならしめた購入予約者の心情を指して「愛国心」と称し、ドイツ外から多額の購入費用を送金した人物を「最も熱烈な愛国者」と呼んでいる。すなわちここでの「愛国心」あるいは「愛国者」という語は、政治的な意味合いで使用されているのではなく、文化の領域に関し、自国の言語文化を促進する心情、あるいは促進に寄与する人物、という意味で使用されている。しかもそれが、書籍出版のための費用調達という、経済的な面と深く関わっているのである。

上に紹介した引用文では、ドイツの言語文化の所産たる『日本誌』の出版に関して「愛国心」ないし「愛

国者」という語が使用されていた。ここでは英仏とは異なるドイツ言語文化圏を念頭に置きながら、ビュッシングが„Patriotismus“ないし„Patriot“という概念を使用していたと考えられる。ところで前節で述べたように、ビュッシングの使用する「祖国」あるいは「国民」という概念は、19世紀的な国民国家の枠組みから多少とも外れる側面を有していた。実は『日本誌』発刊促進といった領野に関しても、ビュッシングの発言の中には、広くドイツ言語文化圏に眼を向ける側面が存在するとともに、他方かなり限定的にレムゴ関係者ないしリップペ伯に対して資金の拠出を求める、といった面が見られる。例えば、レムゴでケンペルの原稿が発見された直後の1773年8月、ビュッシングは、発見された原稿を書物の形で出版することがレムゴ市の榮譽となると述べた後で、次のように論じている。

「まさにそれと同じ理由により、この貴重で有名な著書——その英訳と仏訳は豪華な印刷本である——をドイツの祖国の榮譽のため(zur Ehre des deutschen Vaterlandes)、英仏訳に劣らぬくらいに美しく、しかし安価に提供するため、レムゴ市自身、いやそれどころかひょっとして統治者であるリップペ伯が、印刷費用の幾分かを拠出することを、私は望んでしかるべきであろう。」(9.8.1773, S.253)

英仏訳に劣らぬくらいの豪華本でドイツ語原典版を出版することを「祖国の榮譽」としている点について言えば、ビュッシングはドイツ言語文化圏全体を念頭に置いているようである。しかしその実現のための資金調達という具体的な話題になると、急にレムゴ市なりリップペ伯なりといった具体的な地域、あるいは統治者の固有名詞が登場する。逆に言えば、ビュッシングは「ドイツの祖国」という幅広い概念を使用しながらも、直接にはレムゴ市民あるいはリップペ伯といった狭い範囲の人士の愛郷心に訴えて、出版費用の調達をはかっていると解釈し得るのである。

実際、『週報』にはかなりの頻度で『日本誌』出版のための資金調達についての話題が登場する。例えば予約購入に関して言えば、ビュッシングは1775年の記事で、ロシアのサンクト・ペテルブルクから14件の購入予約申し込みがあったことを報告し、「ベルリンでそれを遙かに超える数が期待されないだろうか」(6.2.1775, S.48)と述べている。1775年のこの記事は、『日本誌』予約購入に関する情報のみの、わずか数行の文章で一本の独立した記事を構成している。それだけに、ビュッシングがいかに『日本誌』の予約購入の状況に注目し、これを『週報』誌の記事にしてドイツの知識人社会に報道すべきものと考えていたのかが伺い知れる。

『日本誌』上巻が出版される前年の1776年には、予約購読のための前払い金が5ターラーである旨、具体的な金額まで明示して、いまだ『日本誌』の予約をしていない『週報』読者に対して『日本誌』の購入を勧める記事が掲載されている。

「この著書は確実にそして美しい形で頒布されるので、多くの人が次のように決心するであろうと推測し得る。すなわち、この著書に対して金貨5ターラーを前払いし、そのことにより本書の出版を促進するのみならず、自分の蔵書に本書を加えようと、多くの人は決心するであろう。」(19.8.1776, S.275f.)

学術雑誌である『週報』に登場する文章にしては、かなり宣伝色の強い書き方になっている。本節冒頭に述べたように、ビュッシングは愛国心に訴えて『日本誌』の購入を勧めていたが、単に予約のみを勧める上の文章と併せ読むと、ビュッシングが「愛国心」「祖国」「国民」といった概念を使用している背景には、きわめて現実的・経済的な要請があったものと推測し得る。

資金調達については、予約購読だけでなく、調査研究についてもビュッシングは話題に出している。すなわちビュッシングは、レムゴ原稿以外のケンペル自筆原稿を調査するため、編集者たるドームを大英博物館に派遣する必要性を訴え、その費用の調達についても『週報』の記事で話題に出している。1775年ビュッシングは、大英博物館に保管されているケンペル自筆原稿について大英博物館副管理者プランタ²⁰から寄せられた情報を紹介し、そして在英資料の写しを取ることの必要性を指摘した上で、次のように述べている。

「しかし、相当な額になるそのコストを、誰が引き受けようとするであろうか。研究者ひとりではこのようなコストを負担しきれないし、一書肆がその肩代わりすることも出来ない。ハノーファー王国選帝侯国政府が学問の世界に善意をお示しになり、かの情報を学問の世界にもたらすべく、適任者たるドーム氏をロンドンに派遣して頂ければ、と思うものである。」(10.4.1775, S.115)

当時のイギリスはいわゆるハノーヴァー朝であり、ドイツのハノーファー選帝侯国とは同君連合をなしていた。したがってロンドンとハノーファーの間では人士の交流が盛んであり、そもそもケンペルの原稿がロンドンに売却されたきっかけも、イギリス王ジョージⅠ世（ハノーファー選帝侯ゲオルク・ルートヴィヒ）がドイツに里帰りした際に、その随行員で国王の侍医でもあったシュタイガータールがケンペルの遺品の調査に当たったことにある²¹。そのようなことから、ビュッシングがドームのロンドン派遣の資金拠出を、他ならぬハノーファー選帝侯国政府に対して期待したのも、きわめて自然な判断であったと言い得る。

実際にドームがロンドンに行くことは叶わなかったが、われわれとしては、ビュッシングがイギリスとハノーファー選帝侯国の関係に訴えてまで、研究者派遣のための資金調達の方途を学術誌『週報』誌上で探った、という点に着目したい。すなわち、『日本誌』発行のための予約購読といい、研究者派遣のための資金調達といい、学術誌『週報』は、学術進展のための経済的基盤についての情報をも提供していたのであり、この面からも、ビュッシングの言う「祖国」「国民」ないし「愛国心」の含意がかなり広範なものであったと考え得るのである。

7 結語

18世紀末のドイツにとって、日本はキリスト教文化圏から遠く離れたきわめて異質な文化圏に属する国であった。そのような状況の中で、学術雑誌『週報』における『日本誌』出版についての報道は、日本文化の異質性を強調する、あるいは奇異の目で見るといった方向性を全くと言ってよいほど有していなかった。『週報』誌においては、むしろ文献学的な面からの検討が中心であり、先行する英訳な

いし仏訳に対して、ドイツ語原稿に基づくドーム版『日本誌』の文献学的・学術的価値の高さを称揚するという面が強く打ち出されていた。また単に英訳・仏訳の問題点を指摘するといった方向のみでなく、逆にドイツ語原稿の方に不備があることも指摘し、英訳の方がケンペルの真意を伝えるという部分があることも指摘している。また、英訳・仏訳との対比に入る前にドイツ語原稿の筆跡鑑定を行い、それがケンペル真筆であると確認した上でその後の議論を進めており、これらの面を勘案すると、『週報』誌における報道はきわめて学術的なものであったと評されよう。

ただし本論文前編で示したように『日本誌』のタイトルについては、ケンペルが前著『廻国奇観』で予告していた『今日の日本』(Heutiges Japan)を採用せずに、1773年の原稿発見時から1777年の出版まで、適宜複数のタイトル案を提示し、最終的に『日本誌』(Geschichte und Beschreibung von Japan)に落ち着く等、かならずしも文献学的に厳密とは言えない変遷ぶりを示している。また『日本誌』の出版促進を「愛国心」や「ドイツの祖国」といった概念に絡めて訴えている点、あるいは予約購読を積極的に読者に訴えている点等、今日の観点からすると学術雑誌的ではない面も『週報』には含まれている。

ビュッシングの個人編集による、そして寄稿者もビュッシングのみである『週報』は、学術雑誌といっても、今日の学会誌あるいは大学の紀要等とはかなり性質が異なり、いわば総合学芸誌とでも言うような性格を持っていたと言える²。

本来ならば『週報』誌の他の記事の書き方を調査し、さらには18世紀ドイツの他の学術誌の諸論考をも調査した上で、啓蒙期ドイツの学術雑誌のあり方を議論すべきであるが、筆者の関心はむしろケンペルの原稿発見という事態を当時の知識人がいかに受け止め、どのように報道したか、ということに向けられており、本論文においては、ひとまずケンペル『日本誌』に関する『週報』誌における報道に限定して、上記の結論を述べる次第である。

註

¹ 拙論「ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道(前編)」大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2008 ドイツ啓蒙主義研究9』2009年5月(35-42頁)を参照。

² 『週報』からの引用箇所は、刊行年月日およびページ付けを括弧にくくって示す。なお本研究プロジェクト前号註4において示したように、『週報』1777年3月24日号の刊行年については、現物(筆者がベルリン国立図書館にて入手したもの)においては、「1774年」という誤植が見られた。本論文においては、1777年と正した年号を記載した。なお本論文においては、„Original“のほか、„das ursprüngliche Werk“および„Urschrift“にも「原典」という訳語を与えた。

³ ビュッシングは「私はそのために第1巻第5章を選ぼう」(Ich erwähle dazu das fünfte Kapitel des ersten Buchs)と述べ、例として挙げるのが「第5章」であることを明確に述べている。実はロンドン原稿ではこれは「第4章」にあたる。複雑な話であるが、この章はショイヒツァーの英訳では第5章に相当する。つまりショイヒツァーは、翻訳底本であるロンドン原稿に対して手を加え、もともとの(すなわちロンドン原稿の)第1章の前に、さらに別の「新第1章」とでも呼ぶべき章を付加した。すなわち、ケンペルが書いたシャムについての原稿を適宜英訳の上、新第1章としたのである。ビュッシングが「第5章」と述べていることから判断して、レムゴ原稿の章立てが、ショイヒツァーの英訳版章立てを踏襲していることが分かる。すなわちロンドン原稿の方がケンペルの意図を反映した古い形を残し、他方レムゴ原稿が、ショイヒツァーの編集した新しい形になっていることが、『週報』におけるビュッシングの何気ない記載から伺えるわけである。

⁴ この文章は、レムゴ原稿そのものをビュッシングが引用(転記)したものであり、ドームが編集する以前のオリジナルの形を今日に伝える、非常に貴重な文章である。

- ⁵ Kaempfer, Engelbert: Heutiges Japan. Herausgegeben von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel. In: Engelbert Kaempfer Werke. Bd. 1/1, München (iudicium), 2001, S.57. なお本論文において同書から引用する際には Heutiges Japan と略記した上でページ数を示す。
- ⁶ Kaempfer, Engelbert: Geschichte und Beschreibung von Japan. Aus den Originalhandschriften des Verfassers herausgegeben von Christian Wilhelm Dohm. Unveränderter Neudruck des 1777-1779 im Verlag der Meyerschen Buchhandlung in Lemgo erschienenen Originalwerks. I. Bd., Stuttgart (Brockhaus) 1982, S.86. なお本論文において同書から引用する際には GBJ と略記し、そのあとに上巻から引用する場合は I、下巻から引用する場合は II を付し、最後に出典ページ数を示す。
- ⁷ 拙論「ケンペル『日本誌』とビュッシング」(仙葉豊・高岡幸一・細谷行輝編『言語と文化の饗宴』英宝社、2006 年 3 月、所収)を参照。
- ⁸ GBJ II, S.184.
- ⁹ GBJ II, S.184, Anm.
- ¹⁰ Kaempfer, Engelbert: The History of Japan, tr. by J. C. Scheuchzer, London 1727 (reprint Tokyo: Yushodo 1977) p.435. なお本論文において同書から引用する場合には History of Japan と略記した上でページ数を示す。
- ¹¹ なおロンドン原稿ではこの部分は „landes manier und ihres Ordens gebrauchte nach nicht beschahmt fallen“ と記載されている(Heutiges Japan, S.344)。すなわち「この国のマナー及び宗派の習慣に従えば、恥ずべきことにはならないのだが」となり、ジョイヒツァーが正しく英訳していたことになる。
- ¹² GBJ II, S.235f.
- ¹³ GBJ II, S.236, Anm.
- ¹⁴ History of Japan, p.486.
- ¹⁵ ただしロンドン原稿では、「男子120万、女子140万」という数字が明記されている(Heutiges Japan, S.390)。つまり翻訳者であるジョイヒツァーは、自分が翻訳しているドイツ文の内容に疑問を抱き、いわば編集者的な態度を以てこの数字を誤謬と見なして削除したわけである。なおロンドン原稿を眼にすることのなかったドームが「男子120万、女子140万」という数字をそのまま訳出している点から考えると、ドーム版の翻訳底本たるレムゴ原稿が現存していたことが裏書きされ、ドーム版捏造説は否定される。この点に関しては、ドーム版に注記された英訳版とレムゴ原稿のすべてについて調査の上、別稿を草して考察の予定である。
- ¹⁶ GBJ II, S.236, Anm.
- ¹⁷ GBJ II, S.236.
- ¹⁸ 本文で「きわめて自然な判断であった、と言えよう」という書き方をしたが、自然であることが事実であるとは限らない。ジョイヒツァーが依拠したロンドン原稿においては、実はドームが眼にした原稿と同様、「京都改」の部分は欠落している(Heutiges Japan, S.390 参照)。すなわちジョイヒツァーは、もとの原稿に掲載されていない(しかし掲載されるはずであった)京都改のデータを、別途どこからか(おそらくスローンに売却されたケンペル旧蔵品から)探し出し、それを自己の英訳版の中に挿入したのであろう。ロンドン原稿を参照し得なかったドームは、よもやジョイヒツァーが自己の判断で別の箇所からデータを挿入したとは思ってもせず、ジョイヒツァーの翻訳底本となった原稿のほうがレムゴの原稿よりも完全なものであったと判断したのである。
- ¹⁹ 同様の例として、ビュッシングの次の発言が挙げられる。「ドーム氏は当地 [=レムゴ] にてケンペルのオリジナル日本論の編集についての第2報を出版した。それはあらゆるドイツの愛国者(alle[r] deutschen Patrioten)の注意を引くに値する。」(14.11.1774, S.364) これは『週報』誌1774年の記事で、『日本誌』の編集状況を報知する「ケンペル日本記述の原典に関する報告」第2報をドームが出版したことを報じたものである。ここでも「愛国者」という語に「ドイツの」(deutsch)という形容詞が付されていることが注目される。
- ²⁰ 『週報』誌には単に「ロンドンの大英博物館副管理者プランタ氏(Herr Planta, Unter-Aufseher des Musei britanici zu London)」としか記されていないが、これは Joseph Planta(1744-1827)のことであろうと思われる。ロンドンの Planta がドームやビュッシングにどのような情報をもたらしたか、またその背景としてドイツとイギリスでどのような知識人社会の交流があったのかということについては、別稿を草して検討の予定である。
- ²¹ この間の経緯の詳細については、デレク・マサレラ「『日本誌』史 ―ケンペル『日本誌』原稿の購入と出版―」(ボダルト＝ベイリー／デレク・マサレラ編、中直一・小林早百合訳『遙かなる目的地 ケンペルと徳川日本の出会い』大阪大学出版会、1999 年所収) 140 ページ以下を参照。
- ²² ジョイヒツァーによる英訳版刊行(1727年5月)の少し前、当時の知識人に広く読まれていた『ジュルナル・デ・サヴァン』誌(パリにて発行された文芸批評誌)の1726年10月号と1727年2月号において、英訳版出版の情報が掲載されている。またド・メゾーによる『日本誌』仏訳版刊行(1729年)の2年前、同じく『ジュルナル・デ・サヴァン』誌の1727年10月号に、仏訳版出版が間近いこと、また講読予約金が20フロリンであること等の記事が掲載されている(マサレラ前掲 170 ページ及び 172 ページを参照)。すなわち学術書の発刊直前にその内容を紹介し、知識人社会に注意を喚起し、ひいては購入を呼びかけるという手法は18世紀末ドイツの『週報』誌のみに見られたわけでないということが伺える。